

明治四十五年三月三日發兌

西洋畫の觀方

故大下藤次郎

(本篇は大下君が生存中、予の雜誌『文學界』の爲に、該誌の速記者に口授せられしもの、故人を忍ばんが爲に、今之を譯出して君の紀念の『みづゑ』に寄す。峯間庶水識す。)

近頃繪畫の展覽會が大分盛んになり、殊に西洋畫に就いては、彼の邊鄙な地方までも、之を觀る機會が多くなるやうになつた。無論地方には、展覽會といふやうなもの、さう度々はないが、智識の普及に連れて雑誌がどん／＼地方に這入る。其の雑誌の口繪が多く西洋風の繪であるので、それで地方に居つても、西洋畫に目を觸れる機會が多いのである。此れ等の影響でもあらうが、地方の青年側では、水彩畫を弄ふものが段々に多くなつて來て、私共の發行して居る雑誌「みづゑ」は、大分此の方面に歡迎されて居る。

水彩畫は、無論西洋畫に相違ないが、併し、西洋畫の本色は寧ろ油繪にあるので、西洋の方では、油繪が素晴らしい勢力を有つて、居つて、水彩畫の方はそれ程ではない、處が、日本は之に反して、油繪も有るけれども、水彩畫が一番勢力を有つて居る。此れは何ういふ譯かといへば、水彩畫は同じ西洋畫であるけれども、油繪より比較的日本畫に近いので、自然日本人の趣味に合ふ所が有る爲であらうと思ふ。故に嚴格の意味から云へば、日本人の目に多く觸れる西洋畫は、純粹の西洋畫ではなくして、半ば日本化した西洋畫とも云ひ得るのである。實際又雑誌の口繪などは、西洋風ではあるものゝ、純粹の西洋風といふことは出來ない。併し、純粹・

不純粹は且らく措いて、西洋風の繪が多く日本人の目に觸れるやうになつて來たことは事實である。處で、さういふやうに、西洋畫が盛んに、地方人の目にも觸れる機會が多くなつて來たが、併し、之を觀る地方人は、何うも西洋畫は我々に分らぬといふ人が多い。如何にも此れは尤もな譯で、なまじつ、か分るといふ人が怪しいので、分らぬといふ人は實際正直なのである。何故といへば、此の西洋畫を觀る人は、從來皆日本畫を見慣れて居るので、詰り其の日本畫を標準として、觀るから分らぬのである。日本畫の立場を離れて、西洋畫の立場を了解して觀れば、分らぬ筈は無いのであるが、目の習慣は致方の無いもので、西洋畫が分らぬといふのは、全く無理のない正直な告白である。

日本畫は古人の粉本を土臺にして、それに對して筆力が何うであるとか、氣韻が何うであるとか、といふ觀方をするが、西洋畫は直に「自然」に就いて、その心持が能く現はれて居るとか、此れは何を畫いて居るとか、といふやうに觀る。さつと言へば、日本畫と西洋畫とは、斯ういふ風に觀方が違ふが、例へば、其の何を畫いてあるか、何ういふ心持を畫いてあるか、分るにしても、夫れだけでは矢張西洋畫の善惡が、分らぬ。其の善惡を看るには、別にさういふ方の、教育を要するのである。

然らば、何ういふ風の繪が善いかといへば、色々の條件が有るけれども、先づ畫いたものが其の心持を能く現して居るなら、一番善いとしなければならぬ。其の心持が寫眞のやうに寫つて居るなら宜いのである。例へば、一人の娘を畫くなら、其の愛度氣ない態度を能く現はすとか、或は櫻の繪なら、其の爛熳とした趣が能く出て居れば、これは何れも善い繪である。小供を畫いて老人染み、櫻を畫いて冬の景色のやうに見へるのでは不可ない。此の感じが先づ標準となるのである。細かく分けてお話をすれば、際限が無いが、概括して言へば、形に無理が無く、色の調和が能く出來て居るのが、次に來る必要條件である。調和といふことは、音樂でいふと、調子外れにならないやうに、所謂宮商が能く和諧することを要するのである。さういふやうな處に注意して、それ等の條件が能く具はつて居るなら、善い畫と謂つて差支無いと思ふ。先づそんな標準で繪を

見たならば、實際は其の範圍内で、色々の區別が有るけれども、大して間違が無からうと思ふ。

此の外、西洋畫を觀るに當つて、距離といふことが必要である。西洋畫は、普通對角線の二倍の處で見らうに、其の標準で大概出來て居る。故に、それ以上に離れて觀ても不可、夫れ以内には近寄つて觀ても不可ないのである。繪が餘り近く目に這入つては、言はゞ、あらが見へるといふやうな譯で、眞の繪の見所を失ふことになる。さういふやうな標準から、室の適當な所に繪を掛けて、室の眞中の椅子から觀られるやうにするが宜い。若し非常に大きな繪であるならば、それを室内に掛ける時には、座つて居るにも椅子に掛けるにも、觀る人の目と平面になるならば宜い。必ずしも日本の部屋であるからといつて、なげ、しの上に掛けなければならぬといふ譯は無い。釣額にしても宜いし、或は座席に應じて、即ち椅子の座布團との工合に依つて、其の繪を屈めても仰向けても宜い。此の掛方と距離とに依つて、繪が非常に觀善くもなれば、觀惡くもなるから、此の點は餘程注意が肝要である。

それから、保存のことも、次手にお話して置かう。近頃西洋畫を愛する人が多くなつて、大變應接間などに掛けて置くが、それに就いては保存の必要がある。日本畫であると、一週間位で、掛更へるのが普通であるから、別に言ふことも要らぬが、西洋畫になると、大概長く晒されて居るやうである。そこで、保存の方法が肝要になつて來るのである。併し、單に保存の側から云へば、西洋畫は日本畫に比較して仕易い方である。西洋畫は倉に仕舞つて置いて、濕氣を受けるだけであるが、日本畫は、其の外に虫が附くといふ憂が有る。そこで、西洋畫の保存には、濕氣を防ぐといふことが、第一の要點で、さうするには、何ういふ注意が宜いかと言へば、油繪の方は、ワニスを繪の上に引くのが當前である。硝子を張るのも悪くはない。水彩畫やパステルの方は、硝子を張るのが普通である。それで先づ大概保存されることになつて居る。濕氣の外には、直接日光を受けるとか、即ち強い光線に觸れるといふやうなことも、害にはなるが、繪は大概室内に掛けてあつて、其の害を受ける機會は、滅多に無いから、此れは別に注意する迄も有るまい。